

中途視覚障害者のための新たな点字独習教材についての検討

— 「点字入門 2002 年版」を通して —

Study of a New Textbook for Independent Learning of Braille: Targetted to Persons Who Have Become Visually-Impaired in Their Adulthood -- Focusing on "Tenji Nyumon (the First Step towards Braille), 2002 Edition"

立花 明彦

Akehiko TACHIBANA

(静岡県立大学短期大学部)

松谷 詩子

Utako MATSUTANI

(社会福祉法人日本点字図書館)

はじめに

視覚障害がもたらす障害はいくつもあるが、その中で最も大きく、かつ深刻なものは行動、および読み書きのそれである。このうち読み書きについては近年、パーソナルコンピューターの普及に伴い、各種の視覚障害者用ソフトが開発され、以前に比べ、その環境は改善されてきたと言える。とはいえ、簡便で自らが直接読み書きできるものは点字であり、その存在はいかに技術が発展しても変わるものではない。ここに点字を学習する意味があり、特に中途視覚障害者にとってそれは新たな人生を開くカギでもある。ところが中途視覚障害者が点字を習得することは、様々な原因があって決して容易ではない。このため、点字使用者の数は思いのほか少ない結果となっている。2001年6月に実施された視覚障害者生活実態調査によれば、点字を必要とする重度視覚障害者のうち、点字が読める者は身体障害者手帳1級で105,000人中22,000人(21%)、同2級では74,000人中9,000人(12.2%)である。一方、点字を学びたいとする者は1級で9,000人(8.6%)、2級で4,000人(5.4%)であった。

中途視覚障害者の点字習得を困難にしている原因の一つは、適切な指導者、および教材の提供がなされていないことにあると考えられる。そこで2002年5月、筆者らは従来の中途視覚障害者用点字独習書の改訂版として新たな教材『点字入門2002年版』(以下、2002年版と略)を世に送り出した。それは、筆者らのこれまでの点字指導の経験や先行研究などの結果を反映させ、従来にはなかったいくつかの試みを盛り込んだものである。

本稿は、今後の中途視覚障害者用点字学習教材作成の1資料とするため、筆者らが関わった教材を元に、編集方針、内容などに求められる事柄をまとめるとともに、利用者の反応を整理し、残された課題を考察するものである。

1. 点字独習書発行の経緯

(社福)日本点字図書館では、1940年の開館以来、全国の視覚障害者を対象に図書の貸出サービスを行なっている。その歩みの中で、利用者開拓の重要性として、中途視覚障害者への点字の普及に目を向ける必要が生じた。そこで1955年、そのための点字学習書として『点字入門』の初版が当時の館長本間一夫によって企画・発行された。また1960年からは点字教室の事業を

開始し、今日に至るまで来館可能な多くの中途視覚障害者に点字学習の機会を提供し続けている。

言うまでもなく点字学習は、情報提供施設における点字教室や、リハビリテーション施設等の専門機関で適切な援助を受けながら行なうのが望ましいが、さまざまな理由によりそれが不可能なケースも少なくない。したがって、そうした点字学習希望者のための独習用教材として『点字入門』の需要は、初版発行以来変わっていないと思われる。

一方で、1890年に日本の点字体系が確立し、その普及が進むにつれ、表記の全国的な統一が求められるようになった。1966年には、現在日本の点字表記を決定する唯一の機関と位置付けられる日本点字委員会の発足をみる。1980年同委員会が特殊音の整理と点字における仮名づかいの見直しを行ない『改定日本点字表記法』を著した。この動きを受けて『点字入門』も大幅に手を加える必要が生じ、1982年『新定番点字入門』を発行することになった。

初版以来『点字入門』は、一部の浮き出し文字、点字文、およびその内容を記した墨字からなる冊子形態の教材であったが、新定番の編集を機に、カセットテープに録音した解説を付け、独習書としての内容強化を図った。1986年、国語審議会が「改定現代仮名遣い」を公表したのを受け、1989年、点字の仮名づかいについていくつかの変更を加え『新訂第2版』を発行したが、その後見直しは行なわれなかった。

2001年、『日本点字表記法2001年版』が世に出たのを機に、『点字入門』の内容について、分かち書きや網羅すべき文字など、表記上の変更が必要になった。また点字教室における中途視覚障害者への点字学習支援の経験から、指導法の見直しも必要と考えられた。そこで、現場での指導経験をもつ者、および現在も現場にいる者が経験を踏まえつつ時代のニーズに沿った新たな『点字入門』の編集に取り組んだ。

〈表1〉 『点字入門』改訂の流れ

1955年 5月 20日	初版発行
1964年 7月 30日	改訂版発行
1982年 5月 1日	新訂版発行
1989年 11月 1日	新訂第2版発行
1998年 9月 1日	新訂第2版4刷
2002年 5月 1日	「点字入門2002年版」初版発行

2. 編集方針

2002年版の編集にあたっては、次の6点の基本的方針を掲げた。

(1) 独習書を継承するとともに、学習にあたってのナビゲーションを充実させる

先にも記したように、本教材は視覚障害者のための独習書として発行されてきた。点字の学習にあたっては、独習よりも指導者の下で学ぶべきと考えるが、様々な事情によりその形態をとれない人々がいる。日本点字図書館用具課へは、そうした人々からの学習書についての問い合わせが絶えない。また従来の版は目立つ数ではないものの常に買い求められている。こうした状況を考えると、独習書へのニーズは常時あり、これに応える必要があると判断される。については、独習上の精神的、肉体的負担を軽減すると同時に、可能な限り学習しやすい条件を

提供することから、ナビゲーションの充実を編集方針の一つに掲げた。

(2) 網羅する文字の範囲

独習書であることから、点字の文字および記号・符号の全てを取り上げ紹介することは不可能であると考えられる。そこで本書は入門書であることを鑑み、網羅する文字は五十音・濁音・半濁音・拗音・拗濁音・拗半濁音・数字・特殊音・アルファベット、およびよく用いられる記号数種とした。

(3) UV点字を採用する

点字の学習を始めた直後は、点字に触れるときの触圧が高く、合わせて同じページを何度も読み直すことが多い。そのため、エンボス式の点字では、用紙に打ち出された点が高い時期に摩滅してしまう。これは当然の結果のようであるが、一方で学習の継続が困難となり、学習上の負担を迫ると同時に、学習者の意欲を削ぐことにもつながる。そこで、これらの問題への対応としてUV印刷による点字を採用することにした。またUV点字では点の摩滅がないものの、用紙の厚さによっては点字を読むとき他のページの点を感じられ、それが触読の妨げとなることもある。この点については、可能な限り厚い用紙を用いるよう配慮する。

今日、UV点字の印刷を手がける業者は複数存在するが、業者によって点の形状や品質に差が見られる。このため、いくつかの業者の点字を比較し、コスト面をも含め完成度の高い業者の選定に努める必要がある。

(4) 点字のサイズに配慮する

中途失明者に対して点字の触読を困難にしている原因はいくつかあるが、その一つは点字のサイズにある。点字のサイズと触読の関係についての研究は既に幾人かの人々によって行われており、日本の点字サイズは海外のものに比べ中途失明者には読みにくいとの結果も示されている(鴨田真理沙・藤木浩志(2001)、吉田道広・澤田真弓・正井隆晶(2002))。筆者らも点字触読指導の経験の中から点字サイズの問題を実感する。このため、学習者の点字への抵抗を和らげ、少しでも触読できる自信を得ていただきたいとの願いをも込め、パーキンス製点字に近いサイズの使用を業者へ依頼した。このとき、用紙サイズA4、1行のマス数30を条件に加えた。その結果、採用した点字のサイズは以下のようになっている。(数値は、業者が実物を顕微鏡で測定した値)

直径：1.8mm 高さ：0.35mm

タテ点間(1-2間)：2.3mm、ヨコ点間(1-4間)：2.3mm、マス間(4-1間)：3.8mmである。木塚泰弘(1993)の調査による日本の点字のサイズはタテ点間(1-2間)：2.37mm、ヨコ点間(1-4間)：2.13mm、マス間(4-1間)：3.27mmで、パーキンス製点字のそれはタテ点間(1-2間)：2.35mm、ヨコ点間(1-4間)：2.35mm、マス間(4-1間)：4.05mmである。これからすれば、本書での点字のサイズはマス間が0.2mm異なるだけで、他においてはほぼパーキンス製点字のそれに等しいと言える。

〈表2〉点字のサイズの比較

	日本標準	パーキンス	2002年版
タテ点間 (1-2間)	2.37mm	2.35mm	2.3mm
ヨコ点間 (1-4間)	2.13mm	2.35mm	2.3mm
マス間 (4-1間)	3.27mm	4.05mm	3.8mm

(木塚泰弘 (1993) を参考に筆者作成)

(5) 浮き出し文字によるページ数の表示

従来の版でもページ数は、点字による数字のほか、墨字を浮き出させた点線文字をも併記していた。これは、まだ点字を触読できない段階での学習者にとってページを検索するうえで有効である。そこで今回の版においてもこれを継承することとした。その大きさは縦18mm、横は11mm～14mmである。旧版と同様の大きさとしたが、結果的には縦横とも2mm小さくなっている。各ページの1行目はこの数字の記入に当て、他の点字との区別を図るため、リード線を挿んで記す。

(6) 晴眼者の支援を受けやすいよう墨字を併記

点字の学習を進めていく過程では、示されている文字や語例などの言葉について確認することも生じるであろう。独習書とはいえ、こうしたとき他者の援助を受け易いように配慮することも必要と考える。この点において、従来の版では点字の内容を墨字でも印刷し、見開き状態で左側のページにこれを付けた。

今回、UV点字を用いることの副産物として、点字と墨字の併記が可能になったので、全ての点字には各点字の上方に、対応するカナを付した。合わせて、点字の印刷は片面のみとし、旧版同様、見開きページの左側は点字が示されている右ページの内容をそのまま墨字で表し、援助者への便を図った。

3. 各ページの構成と特徴

点字を示した部分は30ページからなる。このうち、1～2ページは点だどりの練習に当て、3ページから12ページでは清音を紹介している。続いて13ページから17ページで濁音・半濁音を、18ページで数字を取り上げた。拗音・拗濁音・拗半濁音は19ページから25ページで、特殊音・アルファベット・文章記号は26ページから29ページで紹介した。最終の30ページは総復習としての腕試し的な内容に当てている。

以下、各ページの構成と特徴について述べる。

(1) 点だどり (p1～p2)

多くの点字学習テキストは、最初のページを点だどりに当てるが、本書もまたそれらに倣うかのように1～2ページは点だどりとした。

1ページの上半分は、線の長さ、太さを見分ける課題としての点線を数本並べた。また下半分には、点と空白部の区別を理解する課題としての各種点線と、スムーズな横移動を図るため、点と点の間隔に変化をつけた点線数本を記した。

2ページ前半では、横移動のスキルアップとして上下に変化する点線、上下に変化しながら、かつ線の太さも異なる点線を並べた。また後半では1マス内での縦の点の長さ、太さを区別すると同時に、縦の指運動のための課題を提示した。点線の長さは、実際の点字文でのわかち書

きでのマス数の長さ大きく乖離しないよう留意し、15マスを越えるような点線は避けた。また各行の先頭部をわかりやすく示すため、行頭にランドマーク的な「メ」の字を付した。

(2) 清音 (p3～p12)

3ページからは1マス中の点の組み合わせを形として捉え、それぞれに読みを付していく「文字学習」の段階に入る。ここでは、独習用教材であるという本書の特性と全体的なページ立てを念頭に置き、文字導入に当たって次の諸点に配慮した。

- ①10ページで清音を学習し終えるよう、各ページの新出文字数は5文字前後とする。
- ②各ページの導入文字は、学習者が形とその読みを結び付け、整理して記憶しやすいよう、五十音の行ごとに取り扱うが、行の配列は、触読の難易度を考慮して、認知しやすい順に導入する。そこで、本書はア行、ナ行、ワ行、ハ行、カ行、サ行、ラ行、タ行、マ行、ヤ行の順とした。
- ③長音符は「カ行」(p7)、促音符は「タ行」(p10)、句点は「ヤ行」(p12)の導入時、それぞれ同時に提示し、点字の表記上の特徴について具体例を示しながら解説テープの中でごく簡単に触れる。

各ページは、最初に新出文字を提示し、その後1文字ずつの触読練習のために新出文字を順不同に2マスあけて提示している。

次に、新出文字を含んだ単語の読み方練習、さらに次の段階としてp5からは短文の読み方練習を提供している。これは、文字だけを追うのではなく、単語単位、さらには短文単位で点字を読み、「意味」が判る喜びをできる限り早い段階から学習者に味わってもらうことを目的にしたものである。

単語は、2文字の短いものから、徐々に文字数を増やして提示するように配慮した。また、短文の長さは、学習者の内容把握の限界を考慮し、1行30マス以内に収めるように考慮した。

(3) 濁音 (p13～p17)

五十音のページ同様、最初の行は新出文字の紹介に当てている。既に五十音の学習を終了しているので、その提示順序は五十音どおりとした。続けて4行にわたり新出文字を含む単語を記している。各単語の長さは3文字から7文字までで、新出文字が単語の頭・中・末尾に位置するような語それぞれの収録に努めた。

各ページは短文八つを入れた。短文で用いる濁音の言葉は、基本的に単語で提示したものと重複を避けている。文の内容はオリジナルの文がほとんどであるが、推測しながら読み進める力を養う観点から、童謡の1節や教養として知っていると思われる俳句・諺も含めている。

(4) 数字 (p18)

数字のページでは、新出文字として数符ならびに1から0までの数字、小数点、つなぎ符を提示している。読み方練習では、基本的な数字だけでなく、数字とカナで構成される語句も例示して、つなぎ符の役割を紹介している。また、短文の読み方練習の最後に電話番号を具体的に示し、日常生活の中でごく身近な点字の活用例をイメージできるよう配慮した。

(5) 拗音・拗濁音 (p19～p25)

新出文字の提示順序は濁音同様、五十音順とした。また各五十音の行において拗音のほか拗濁音も存在する行については、それらを含めて1ページにまとめた。したがって、ハ行では、拗音・拗濁音・拗半濁音の3種を一つのページで取り上げている。ページの構成は、基本的に濁音のそれと変わらない。新出文字を含む単語の提示には4行を当て、短文は八つ示している。

1単語の長さは、3文字から7文字の間に留まっている。拗音・拗濁音を含む言葉は、濁音などに比べ全体的に少ない事から、やむを得ず単語・短文両方に提示した言葉もある。また他のページに比べ、外来語を多く採用せざるを得なくなったページもある。短文の内容としては、前段階で学習した数字の復習を兼ね、必ずこれを含む文を二つ設けるよう考慮している。

(6) 特殊音、アルファベット、文章記号等 (p26~p30)

これらのページでは、それぞれ網羅的な一覧を示し、実際に点字を日常生活の中で活用するようになった時に、参考資料となりうるよう配慮した。『点字入門』の学習段階では、これら全ての点字を完璧に習得することが目的ではないので、特殊音のページでは、読み方練習のための単語は、頻出する特殊音を含んだ典型的な単語の例示にとどめた。アルファベットのページにおいても、読み方練習のための例示は、外文字や大文字、外国語引用符の役割の理解を主目的にした。

記号や符号類は、基本的に一覧に掲げるのみとしたが、単位を表すのに用いる特殊な記号や、URL、メールアドレスは、理解を容易にするため具体例を附すことにした。

最終ページには、点字で6、7行程度の短い文章を二つ、腕試しとして収録した。短い中にも話の展開があり、結末でちょっと笑えるような内容のものを選択し「読んで内容を楽しむ」体験をしてもらうことを狙いとした。

4. ナビゲーションテープの内容と特徴

ナビゲーションテープへ録音した原稿の量は約51,000字になった。これは、独習書としてナビゲーションを充実させるとの編集方針と、制作面でのコスト、およびテープの品質上、極端に長いテープの使用は避けるとの各条件をクリアした結果である。旧版では、60分テープ2本を使用していたが、今回は100分テープ2本を用いることになった。

内容的に本文の解説に入る前の段階では、本書発行の目的、使用法、点字を学習することの意義、学習の進め方、点字の歴史、点字の市民権の広がりなどについて簡単に触れている。

本文の点だどりのページでは、点字の触れ方を細かく、かつイメージしやすいようその説明に努めた。またこのページでの課題を達成するため、解説をしながらも学習者にいくつかの問いを示している。

清音のページでは、新出文字について、その文字の形をイメージしやすくするための配慮として、可能な限り文字の形の特徴を紹介している。「ア」や「ワ」など、ともに1点から成る文字ではその違いを触読のうえからも述べた。また読みの練習として短文が盛り込まれるページや長音符を紹介するページでは、点字の仮名づかいについて墨字とは異なる点の解説を簡潔に行なった。

以下、ナビゲーションテープの特徴を記す。

(1) 検索に考慮しチャイム音を導入

カセットテープは手軽であるが故に目覚しい普及を遂げ、特別高価なものでもなくなった。一方で、テープの劣化や検索しにくいなどの欠点をもつ。本書におけるカセットテープはナビゲーションの役割を担うので、少しでも検索しやすいよう工夫が求められる。そこで、各ページの解説が終了するごとにチャイム音を入れた。また点字文の各ページは基本的に進出文字の提示、単語の読み練習、短文の読み練習のブロックから構成されていて、それぞれ点線で区切られている。このため、テープでもそれらの区別をつけられるよう先のチャイムとは異なる音

を入れた。

(2) 行番号で誘導指示

ナビゲーションテープが説明する行と触読の行とが一致しやすいようページ内の解説では全て行番号でその位置を紹介した。合わせて行たどりの向上を図るため、行番号はページ上半分は上から、下半分は下からの指示にしている。

(3) 指運びは「名古屋方式」で指導

触読上の指運びについては、2000年、日本盲人社会福祉施設協議会リハビリテーション部会主催による中途失明者のための点字指導研修会で名古屋リハビリテーションセンターの取り組みが紹介されて以来、その方式が注目されるようになってきている。また正井隆晶・澤田真弓・吉田道広(2002)は、その妥当性を示す興味深い研究を行なっている。筆者らも、その後の指導において、点字学習の初期段階にその有効性が確認できたので、ナビゲーションテープにおいてもこれに倣った。

(4) 文字の説明において6点の番号は使用せず

点字における文字の紹介では、点字の特性を反映し、6点の構成で紹介することがほとんどと思われる。これは確かに合理的であり、書き方からの導入の場合や晴眼者には有効である。しかし読み方から始めた視覚障害者には文字を構成する点の番号だけが記憶され、実際に触読する文字とスムーズに結びつかず、弊害となることが少なくない。このためナビゲーションテープでは、終始6点の番号による説明は避けた。6点の構成を縦3点、横2列と紹介した後は、上中下、左右で示している。これにより、少しでも文字を形として捉えてほしいと願うものである。

5. 本教材に対する反応

日本点字図書館には、中途視覚障害者から点字を学習したい旨の問い合わせがしばしば寄せられる。主に点字教室担当者が対応しているが、ニーズを把握したうえで、可能な限り点字教室の受講を薦める。しかし、地理的、あるいは時間的な問題等で同教室の受講が不可能である場合には『点字入門』を教材の1つとして紹介する。

2003年4月から点字教室の受講を始めたケースの中には、受講申し込み時からその開始時まで3ヶ月の待ち時間、『点字入門』である程度まで独習をしたケースが2例あったので、その学習結果を紹介する。

ケース1：50代女性、網膜色素変性症、身体障害者手帳1級。点字学習の経験はなし。

本ケースは、解説テープを聴きながら点字テキストを触る練習から始めたと言う。文字の形を覚えてから、単語・短文を独力で読み、テープから正解のフィードバックを受けるように学習法を工夫。根気が尽きて、ついテープで先に正解を聴いてから触ると、簡単に読めるような錯覚に陥るので、自制しながら進めたと言う。その後、解説テープは聞かず、テキストのみを何度も繰り返し触読し、例示されている単語、短文は、ほとんど暗記するまでになった。

ケース2：50代男性、糖尿病性網膜症、身体障害者手帳1級。保有視力があった3年ほど前、清音の書き方を学んだが、触読に挑戦するのは初めて。各文字の形に関しては、頭の中で組み立てることができたので、最初の取り組みは解説テープが示す新出文字の形を、指先が感じ取れるかどうかのモニターであったと言う。次に、単語、短文の読み方練習をテープのフィードバックを受けながら繰り返した。

両ケースとも『点字入門』は繰り返し熟読したので、内容はほとんど暗記したと語っている。確かに、その努力により文字の習得は達成されていた。次の課題は、未読の材料を読みこなしていく自信をどのように身につけていくかであり、教室では1ページ10行以内の短いストーリーを読み、内容を把握するトレーニング段階からスタートした。

当初から、70分の受講時間で10個近いストーリーを読んだ。3ヶ月の期間でその程度まで進んでいるケースはほとんどないので驚かされた。とはいえ、一方で文字の形が完璧に頭に入っているにもかかわらず、触読しながら単語として、あるいは文節として声に出して確認することに対し、なかなか自信が持てない様子が共通して見られた。支援者がそばにいる場合、受講者は学習の第1歩から「音読」をし、自分自身の「読み」を確認する習慣を身に付けるが、独習の場合は双方向のコミュニケーションを通してフィードバックが得られないまま学習を進めていかざるをえない。また、内容把握のチェックにしても、支援者と学習者の間のやり取りを通じて訓練されるという経験が得られないのは、やはり初期段階において独習者がぶつかる壁であると言えるかもしれない。受講開始後5ヶ月は、声に出して読み、支援者との会話を通して内容を確実に掴み練習をした。意識的に文節単位、あるいは複数の文節をブロック単位で音読することをとおし、内容把握の定着が明らかに伸びている。受講開始から6ヶ月が経過した時点での二人の読み速度は1ページ(17行)共に約9分である。

二人からは、本教材に対して次のような感想が寄せられている。

- ①解説テープが丁寧で有効的であった。
- ②例示されている単語や短文は、とても良くアレンジされていると思った。
- ③最後のページまで辿りついたころには、文字については習得できていたので、腕試しの短いストーリーは読めるようになっていて、ある種の達成感が得られた。
- ④テープのナビゲーションを頼りに学習を進めたが、短文の部分の解説の読みが早すぎるとい印象を受ける。テープを止めたり、巻き戻したりと工夫をしたが、機械操作に慣れないとちょっと大変。
- ⑤特殊音やアルファベットは例示が少なく、これだけでこれらの文字を完全に習得するのは難しいように思う。参考資料として活用する場合でも、アルファベットはともかく、特殊音では文字の読みが点字で示されていないため、晴眼者の援助が必須となり、独習が困難。
- ⑥文字を構成する点の位置の説明では、点の番号で行なったほうがわかりやすい。

このうち、①④については二人に共通した。

ともあれ二人の事例は、本教材が文字習得における初期段階において、独習書として一定の役割を果たした例ではないかと考えている。

6. 今後の課題

本教材を発行して以来、取り扱い窓口には購入者からの声がときどき寄せられる。それらは、点字を習得しての喜びを語るものや、本書のナビゲーションテープがわかりやすいなどで、編集に当たった者としては喜ばしい限りのものである。とはいえ、早速に新たな課題も見受けられる。

一つはナビゲーションテープの聞き易さの問題である。確かにテープについては、丁寧でわかりやすいとの複数の声をいただいている。また朗読者の選抜でも聞き易さを意識し、これにかなった人をお願いできた。その一方で、読み方練習としての単語・短文に対するテープの案

内が早すぎる、あるいは案内が1回しかなく、録音機の操作上、面倒である、慣れるまで混乱したなどの声もある。また録音に当たっては、発行日の関係からハードスケジュールでの実施となったため、声の疲労度が顕著な録音となり、朗読者、および利用者にご迷惑をおかけする結果となった。次の改訂で改善が求められる点である。

二つ目はナビゲーションの媒体が挙げられる。今日、録音の媒体としてはカセットテープのほか、MDやCDディスクがあり、普及しつつある。それらは、劣化しにくい、トラック単位の移動がスムーズ、長時間録音が可能など、カセットテープが持つデメリットを解消していて、本書のナビゲーションとしては適していると言える。現に、本書の編集方針を決定する段階で、これについては検討したが、時期尚早と判断した。ところが、発行後、なぜカセットテープにしたのかとの問いを複数の方々からいただいている。CDの加速度的な普及の現状を物語る一面であり、筆者らとすれば予想もしなかった問いである。学習者の利便性を図るうえで、重要な課題であると位置づけたい。

三つ目には、ナビゲーションテープでの新出文字の解説における点の位置の説明法がある。一部の利用者からは、便宜上用いている番号を使うほうがわかりやすいとの意見を受けた。阿佐博も「ブックウェブ」No.30、2002年9月号においてこの点を指摘している。筆者らとしては、これまで数字で点字の文字を理解してきた人々を幾人ともなく目にし、その弊害を感じていたため、あえてこれを避け、現行の方式を採用した経過をもつ。確かに先の利用者は番号での案内の有効性を主張したが、別の利用者では全く問題を生じておらず、その意見ももっていない。これは、本教材に出会う以前、すでに何らかの点字学習経験をもつ人に起こる思いのように推測される。われわれが採用した方式が効果を示さないかどうかは今後検証を行なう必要があると考える。

このほか、本教材では点字を読む指について左右いずれか、すなわち自身が好む指を使うよう指導したが、阿佐博は前出の中で両手読みを勧めるべきであると述べている。我々とすれば、中途視覚障害者の場合、特に年齢が高くなるほど、点字学習の初期において両手読みを勧めると、かえって集中できなくなり、それが自信の喪失にもつながり、逆効果となる例を多く見てきたことによりこれを避けた経緯をもつ。よって、阿佐の指摘は受け入れにくい。

採用した単語の妥当性も今後の課題である。言葉は時代とともに変化していく。独習書としての性格とカナ文字体系である点字の両者を考えると、採用する言葉はわかりやすさにも考慮しなければならない。本書の利用者層にも配慮し、これについて今後検証をしていきたい。

〈参考文献〉

- (1) 林美恵子・鴨田真理沙・藤本浩志 (2002)：点字初心者にとって読みやすい点字の形状に関する研究. 第28回感覚代行シンポジウム講演論文集, 139-142.
- (2) 堀内恭子 (1998)：点字の指導方法に関する一考察. 視覚障害リハビリテーション, 48, 13-41.
- (3) 鴨田真理沙・藤本浩志 (2001)：点字パターンが読みやすさに与える影響に関する研究. 第27回感覚代行シンポジウム発表論文集, 59-62.
- (4) 木塚泰弘 (1998)：点字のサイズと手触り. 日本の点字, 23, 19-23.
- (5) 木塚泰弘 (1999) 点字研究の軌跡－木塚泰弘退官記念論文集－.

- (6) 小林秀之・秋山努・水田奈緒美 (2002)：盲児の点字触読速度の発達に関する事例的研究－時間測定法による指導を通して－. 学校教育実践学研究, 8, 87-92.
- (7) 小中雅文・衛藤裕司・小林秀之 (2002)：パーソナルコンピュータの文章読み上げ機能を利用した点字触読指導の試み. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 304.
- (8) 黒川哲字・佐藤光義 (1998)：中途失明者の点字触読と点字弁別能力との関係. 筑波技術短期大学テクノレポート, 5, 185-192.
- (9) 前田政治・井上哲郎・大庭重治・恵羅修吉 (2001)：点間の広い点字の学習が通常の点字の学習に与える影響. 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集, 126.
- (10) 正井隆晶・澤田真弓・吉田道広 (2002)：中途失明者の点字指導に関する研究 (1)－点字触読初期指導における縦読みの有効性についての検証－. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 297.
- (11) 牟田口辰己・中田英雄 (1998)：点字読み塾達者のラテラルリティ. 第25回感覚代行シンポジウム発表論文集, 171-174.
- (12) 牟田口辰己・中田英雄 (1998)：点字読み熟達者の読速度タイプ. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 20-21.
- (13) 牟田口辰己・中田英雄 (1999)：点字片手読みにおける人差し指の運動時間の解析. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 308.
- (14) 牟田口辰己・中田英雄 (2000)：盲児の点字片手読みにおける人差し指の運動時間の解析. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 489.
- (15) 牟田口辰己・中田英雄 (2001)：点字読みにおける両手の利得. 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集, 516.
- (16) 牟田口辰己・中田英雄 (2001)：点字熟達者の読書時における左右人差し指の運動パターン. 第27回感覚代行シンポジウム発表論文集, 87-92.
- (17) 牟田口辰己・中田英雄 (2002)：点字両手読みにおける左右人差し指の読書時間. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 294.
- (18) 大竹勉・星野俊行・米沢義道 (1999)：熱可塑性記録材を用いた点字の評価. 第25回感覚代行シンポジウム, 103-106.
- (19) 大内進・千田耕基・澤田真弓 (2000)：両手を活用した点字触読を促すための指導法の工夫. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 180.
- (20) 大竹勉・小口純・星野俊行・米沢義道 (2000)：点字用熱可塑性記録材の評価. 第26回感覚代行シンポジウム発表論文集, 45-48.
- (21) 佐藤将朗 (1999)：能動的触察条件における点字の読み易さの検討－2 綴り文字の認知速度について－. 日本読書学会第43回研究大会発表資料集, 4-9.
- (22) 佐藤将朗・河内清彦 (2000)：能動的触察条件における点字の読みやすさの検討－未熟達者の2 綴り文字の認知時間について－. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 181.
- (23) 佐藤将朗・河内清彦 (2000)：能動的触察条件における点字のレジビリティの検討. 特殊教育学研究, 38(2), 53-61.
- (24) 佐藤将朗・河内清彦・佐藤義道 (2001)：触読における単語優位効果に関する研究－未熟達者の触読時間の分析－. 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集, 258.
- (25) 佐藤将朗 (2002)：触読における補償仮説に関する研究 (2)－点字劣化条件における熟達

- 者の触読時間の分析－. 日本読書学会第46回研究大会発表論文集, 42-50.
- (26) 佐藤将朗・河内清彦 (2002): 触読における補償仮説について－未熟達者の触読時間の分析－. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 305.
- (27) 李炯夕 (1999): 点字の認知に関する研究 (1)－正眼の状態下－. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 16.
- (28) 李炯夕 (2000): 点字の認知に関する研究 (2)－遮眼状態の触覚再認について－. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 182.
- (29) 千田耕基・大内進・澤田真弓・中田英雄・木塚泰弘・金子健 (2001): 平成12年度一般研究報告書－点字及び触図に関する研究成果報告書－. 国立特殊教育総合研究所.
- (30) 渡邊文章・今野正良 (2000): 後天盲一事例における点字学習の導入過程. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 490.
- (31) 山田邦夫・高木誠一・廣田真・山室隆・和田勉 (2001): ゼログラフィ技術を用いた点字および触図. 第27回感覚代行シンポジウム発表論文集, 117-121.
- (32) 吉田道広・澤田真弓・正井隆晶 (2002): 中途失明者の点字指導に関する研究 (2)－カリフォルニアサイズ点字と国際サイズ点字の触読の違いについての検証－. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 298.

(2003年11月4日受理)

